

編集後記

『2018 広島国際大学総合教育センター紀要 第3号』をここに刊行します。開学20年の節目に第3号を上梓できたことを喜ばしく思います。2018年度は、4月9日の島根県西部地震（最大震度5強）、5月には長野県北部で地震発生（5月12日に震度5弱、25日には震度5強）、6月18日に最大震度6弱を記録した大阪府北部地震、7月西日本豪雨、9月6日の北海道胆振東部地震（最大震度7、北海道全域の停電、いわゆるブラックアウト発生。）、そして年明け早々の1月3日には熊本で最大震度6弱を記録する地震発生と自然災害の恐ろしさをあらためて心に刻みつけられました。西日本豪雨に関しては、本学も東広島キャンパス前の前平山にて発生した土石流が構内に流入、また、呉キャンパスにおいては、土砂災害を原因とする長期断水（坂町小屋浦地区における深刻な土砂災害発生に伴い、広島市から呉、江田島市方面に送水する県営地下トンネルに土砂が流入、呉市内を中心に広い範囲で断水となった。）という事態となりました。本学においても、7月6日（金）休講、各地域における被害の深刻さ、交通網の寸断状況を鑑みて9日（月）に16日（月）までの休講を決定、さらに13日（金）には28日（土）までの休講期間延長通知と慌ただしい対応を余儀なくされました。災害発生当初から本学教職員、学園本部職員に加えて、学生そしてOB・OGの参加協力を得ながら、安全を第一に、復旧、授業再開に向けた営みがなされたことが記録されています。待望の授業再開も、台風12号接近のため当初の予定日であった7月30日（月）が休講となり延期（「災害は忘れる前にやってくる」）、31日（火）からようやく再開、学生諸君の元気な姿を見ることができました（前期授業は8月31日まで実施）。一連の経緯を記録に残していくことは、本学のみならず、教育機関におけるリスク管理・危機管理を考えるための貴重な資産となるでしょう。また、後期授業科目「防災・危機管理学」において急きょ組み込まれた「マイ・タイムライン」（一人一人が自らの置かれた状況を把握したうえで「災害が発生する前に、いつ、誰が、どのような行動をとるかを示した行動計画」（2018.8.29 学長ブログ作成）の試みを始めとして、災害に対する「備え」の充実に向けた努力が本学において重ねられつつあります。

一連の災害では、当たり前の日々のありがたさをあらためて痛感しました。日々、当たり前前に教学にたずさわること、そのかけがえのなさ、また、困難な状況にあつてなし得ること、なすべきことに取り組む人間の営みの尊さを思い知らされました。この度の災害で亡くなられた方々に対して哀悼の意を表するとともに、災害に遭われた方々、復旧、復興に尽力している方々へ心よりお見舞い申し上げます、各位のご健勝を祈念したいと思います。

この度紀要に投稿された諸論考は災害発生に伴う混乱状況のなかで、営々となされてきた研究の成果です。投稿者をはじめ、査読をお引き受けいただいた諸先生、編集、印刷作業に携わられた関係各位にはあらためて感謝したいと思います。何とか刊行の運びとなりました。ありがとうございました。

広島国際大学総合教育センター紀要編集委員長 村上智章